

English Dictionaries in Global & Historical Context(3-5 June 2010, Kingston, CANADA)の報告

本学会は、オンタリオ州キングストンにあるクイーンズ大学で6月3日から5日まで開催された。参加者は主に北米からが多かったが、世界各国より参加していた。学会のサブタイトルは、a conference on the role of English and bilingual dictionaries in society and governance, culture and creativity, literacy and ideology of language であり、研究発表は次の6つに大別できた。(1)国と辞書の関係からの辞書研究、(2)歴史的観点からの辞書研究、(3)個別言語、特殊目的のための辞書研究、(4)学習者辞典の記述内容の改善・充実のための辞書研究、(5)未来の辞書の在り方、(6)辞書編纂の在り方。この6つの分類の中でも、(2)の歴史的観点からの辞書研究がかなり多く、16、17、18、19世紀のそれぞれの時代の辞書の特徴などを述べた発表が多数あり、学会名が示している通り history-dominant の学会であった。

筆者の発表は、上記の(4)学習者辞典の記述内容の改善・充実のための辞書研究に分類されており、当該発表は4件のみ(うち1件は abstract だけの提出)で、phraseology の観点からの研究は筆者のみであった。発表後の聴衆者の反応は悪くなく、phraseology の存在は知っているが、その基本的な考えを説明したという点よりも、なかなか phraseology の考えは浸透しておらず、理解不十分であると感じた。このことと関連して、英語母語話者はあまりにも英語に埋没してしまって、何が phraseological units であるかということも認識できないため、筆者が発表した here we go, here we go again が多機能であるということは、大変興味深かったようである。

上記の発表分類よりもわかるが、辞書の中身改善のためにどうしようか、またどうしたらよいかというような発想に立った研究は主流ではない。一方、過去に出版された既存の辞書を利用して17世紀の辞書の中ではこういう言葉使い、記述であったということを調べるといった保守的な傾向をもつ研究が主であった。

European Society of Phraseology (Europhras) 2010 (30 June – 2 July, Granada, SPAIN)の報告

6月30日から7月2日までグラナダ大学で Cross-linguistic and cross-cultural perspectives on phraseology and paremiology というタイトルで開催された。

筆者が拝聴した研究発表のほとんどは、bottom-up method で、各研究者の母国語と英語で使用されている phraseological units の比較という研究であった。その他の発表もプログラムを見る限りそのような研究が多い。例えば、英語の色を使った phraseological units がスペイン語でどのように理解されているかという研究があり、広い意味での文化的側面からの phraseology があつた。その他、スペイン語、フランス語、ドイツ語の研究発表もあつた。繰り返しになるが、どの研究も英語で使われている phraseological units(日本ではこの言い方が主流であるが、ヨーロッパでは phrasemes ともいう)の equivalent を各言語の中で見つけるという研究が多く、文化と phraseology の結びつきを述べる研究発表もあつた。筆者が行っているような phrasemes の多義・多機能を科学的に見つけるという研究は、主流ではないが受け入れられる。

筆者の発表後の質疑応答では、一定の評価を得た。今回は、口語英語で特徴の一つでもある hesitation fillers はどの phraseological units (you know what, let's say に限定) でも同じ振る舞いをするのかということ述べた。その結果、同じ hesitation fillers でもそれぞれの phraseological units の核となる機能は保持されており、同じ振る舞いをするわけではないことを実証的に明らかにした。また、どのような phraseological units が hesitation fillers になりやすいのかということも述べた。

European Association for Lexicography (EURALEX) in Leeuwarden 2010(6-10 July, Netherlands)の報告

EURALEX は、オランダの首都アムステルダムから列車で 2 時間半北西にいったフリースランド州の州都ルーワールデンで開催された。学会の内容を一言で述べると、Europhras と同様に個別言語の辞書研究の発表が主であった。別の言葉でいえば、plenary lecture を行った Anne Tjerk Popkema の発表タイトル通り、State of the art of lexicography of European lesser used and non-state languages と言える。個別言語の辞書に関する研究発表のほか、software の demonstration などの発表も多く、筆者を含め日本で辞書に携わっている研究者が知りたいような英英辞典の研究は、ほとんどないに等しかった。

では、なぜ上記のような発表が多かったのかということを開催地フリースランド州を考慮に入れて説明しよう。フリースランド州は少数民族のフリージアンが大勢住み、彼らは自らの文化と言語に対して強い誇りを持ち、オランダ人社会に対して、その独自性を強調している。つまりフリースランド州は、マイナー言語であるフリージア語保存のため、その辞書も作成し、国家政策の一環としてフリージア語を守っている。この個別言語、とくに少数派言語の保存に力を入れている学会の一つとして EURALEX があるといえる。このことより、EURALEX では個別言語の辞書研究の発表が多数あったと考える。

筆者の興味はやはり phraseology だったので、phraseology に関する発表を聞いた。どの発表も、辞書のなかで phraseology をどうするか、どうしたらよいか、というのではなく、phrase がそれぞれの辞書の中でどう扱われているか、母国語に翻訳するときにはどうしたらよいか、というような発表であった。そのうち 1 つを簡単に紹介しよう。ブラジルは football が盛んということより、football に出てくる phraseologies (発表者は、phraseological units のことをこう呼んでいた、聴衆者も同じであった) を英語からポルトガル語へ翻訳する際、うまく equivalent を見つけることができない、という発表であった。その他の phraseology の発表は、学習者向け英英辞書の中で phrases がどう扱われていて、それらは母国語ではどのように翻訳されるか、といった内容であった。

次回の 15 回目の EURALEX は、ノルウェーのオスロ大学で 2012 年 8 月 9 日 - 13 日 (日程のみ変更可能性有) で開催される。

(2010.11.25 記)